

科目区分： 教職専門科目
授業科目名： 部活動指導実践論
対象年次： 1年次

これからの部活動指導のあり方をさぐる

音楽教育講座：市川克明

1. 目的と到達目標

本授業は、小中高等学校での課外活動(部活動)における、教員の役割について学ぶもので、指導者として求められる能力・技能・指導力などを身につけるものである。

今年度は、新しく設立された授業であることもあり、試行錯誤の状態が始まったため、あまり範囲を広げず、音楽グループでは部活動一般論に続き、吹奏楽を主に取り上げた。

部活動を取り巻く様々な問題点を洗い出し、その解決策などを含め幅広く考察し、それぞれが様々な意見を持ち、それを他者に正確に伝えることを到達目標に定めた。

2. 概要について

今年度新設された授業で、履修者は1回生合計99名で、体育グループと音楽グループに分かれて授業を進めた。音楽グループは16名となった。

第1～2回は、全履修者合同で課外活動としての部活動の役割、様々な問題点を概観し、授業の動機づけを行った。

第3回からはそれぞれのグループに分かれたが、第8回までは、毎回様々な課題を提示しそれについて意見をまとめる、という形をとった。内容は、特に近年問題になっている、生徒への過重な活動、教員の長い拘束時間に対する問題点、特に部活動で起こりやすい、セクハラ、パワハラ、保護者対応、マネージメント、指導のあり方、外部指導員についてなど、様々な事例をあげて取り組んだ。

第9回以降は近隣の小中高等学校への部活動の見学を行った。さらに、愛媛県高等学校総合文化

祭の見学を含め、学生自身が4つ(県高等学校文化祭、味酒小学校、久米中学校、伊予高等学校)の中から2つを選択し見学した。

16名のグループを3つに分け、見学に行く小中高等学校について事前調査を行い、見学当日もインタビューや調査などを担当し、見学後その成果をまとめて発表する形をとった。

最終の授業では、それぞれのグループが発表し、討論を行った。

3. 授業研究の内容

1) 部活動指導を取り巻く問題点に関して

特に昨年来、部活動を取り巻く様々な問題点が全国的に報道された。長時間にわたる生徒の拘束、いじめ、パワハラ、セクハラ、など部活動を取り巻く問題点はこれまでになく大きく扱われるようになった。

教員の側からすると、終業時刻後の部活指導、土曜日曜の勤務、授業の準備などがおそろかになる、保護者対応の難しさ、予算の確保、指導力の欠如、必ずしも望まないのに部活動を担当、あるいは、指導不可能な部活動の担当などなど、極めて多くの問題が学生より指摘された。

生徒の側も、必ずしも望まない部活動への参加、土日を含む拘束時間の長さ、パワハラ、セクハラ、いじめなど、実際の体験談を含め学生から提議され、また様々な事例を提示し、それについて細かく議論した。

最近では政府与党の中でとりわけ運動部系の部活動のあり方についての議論が進んでいることもあり、非常にタイムリーな話題となった。ただ、

これまでは部活動の問題というと運動部ばかりがクローズアップされてきたが、音楽系の特に吹奏楽では運動部と同じく、あるいはそれ以上に問題が大きいことがわかった。

特に高度な指導においては、外部指導員の確保などの意見が出されたが、予算の問題、指導員の質の問題、顧問の教師との関係など、予想される様々な点に関して議論を進めた。現在上記の与党内の勉強会でも上がっている、指導員の資格審査、なども学生からの意見として出され、その中で各都道府県の教職系大学の役割の提案が行われた。

すなわち、各教職系大学の教員が資格審査を行い、都道府県の教育委員会などが資格を与える、という方法で、特に国立大学の教育学部の音楽、体育講座はそれに適しているとの意見が出された。

さらに今後さらに進むであろう少子化の影響で、部活動そのものが成り立たなくなるのではないかと、との懸念も出された。実際の例として、10名以下あるいは、10～20名程度の吹奏楽部の例が出され、その中でどのように活動していくのか、これまでの学校単位での活動では不可能ではないかと、との意見も出された。そうした中、近隣の学校同士の交流、あるいは異なる校種、例えば、中学校と高等学校の交流など様々な方法が提示された。また、極端な意見としては部活動そのものを学校教育から離し、ヨーロッパの一部の国のように、地域に密着したスポーツ、文化活動という形の提案もなされた。

どのような形をとるにせよ指導者の能力の向上は必要不可欠のもので、与えられた条件でどのように効果的な指導ができるのか、その技術の習得が大学においても必要であるとの結論に達した。

2) 地域社会を核とした教育と研究のつながり

これまでは、大学における教育活動の学びは、授業や生徒指導が主であったが、今回部活動に特化した学校教育のあり方を考えてみた時、地域社会との密接関係が必要であるという認識に達した。

一つは、大学教育の側から見た点で、今回のように、様々な校種の課外活動を見学し調査することにより、求められる教師像が鮮明になった。授

業だけでできても、生徒指導だけでできても、あるいはそれ以外のことのみができて教員としては十分ではなく、課外活動の指導、ということも教員になる上で非常に重要なポイントであることが理解できた。部活動が名目上は必ずしも教員の仕事の中で重要な役割を果たしていないにも関わらずである。

学生にとり、地域の学校の部活動を見る機会は非常に有益であった。特に、吹奏楽コンクールで常に全国レベルにまで出場する伊予高等学校、西日本大会で最優秀賞を獲得した味酒小学校の練習の様子は、学生たちに大きな刺激を与えた。このように、地域社会へ積極的に出ていくことが、大きなモチベーションにつながった。

地域社会から見ると、大学はある意味隔絶した社会であると言える。しかし、今回様々な学校の教員が口にしていたのは、地域社会と大学生とのかかわりである。すなわち、学校側から見れば、一部の潤沢な予算がある学校では外部指導員など頻繁に呼ぶことができるがそれは本当に一握りであり、ほとんどは顧問が試行錯誤し専門でない楽器を教えている状況があった。今後、大学生の中で高い技術力、教える能力を持つ者がいれば、積極的に社会に出て行って小中高等学校の部活動指導に関わることのできる可能性は大きくなることが予想される。

また、この授業ではないが、高い演奏能力を持った学生が、部活動で培ったノウハウを生かし、地域のNPO法人、高齢者住宅、小中学校で演奏会を行ったが、積極的に地域に出ていき、芸術を通じ交流する機会も増えていくことが考えられる。

3) 授業を通じて

本授業では、必ずしも教員志望でない学生に対しても将来的に有益になるであろうことにも留意した。すなわち、人前で話し、未知の人々とコミュニケーションを取り、意見をまとめて伝える能力は、どのような職業に就くにせよ重要であると考えられるわけである。

部活動指導を通じたマネージメント力は人を動かすための基本的な能力にも通じるように思う。

4. 授業アンケート

毎回の授業時に課題を出し、翌週コメントとして提出させた。その際に、授業に関する記述式の意見を記載するように求めた。その結果は以下の通りである。

- ・これまで部活動は参加するもので、指導する立場ということを考えてことがなかった。この授業を通じ、指導する側の様々な問題点を認識できた。
- ・自分が高校までに参加した部活動ではなく、より専門性の高い内容の部活動の様子を見ることができ教職を目指す者として何が大切なのか意識するようになった。
- ・実際の部活動の現場を見て、多くの問題を抱えながらも一生懸命取り組んでいる生徒たちに感銘し、自分も将来このような指導を行いたいと思った。
- ・部活動の実技指導だけではなく、普段の生徒指導、また保護者との関係など、様々な点が見えてきた。
- ・部活動指導者には単に技術的な能力だけではなく、カリスマ性、人間としての魅力が重要だと思った。
- ・小、中、高等学校の部活動の様子を見て、その発達段階において様々な指導の方法があることがより鮮明に理解できた。
- ・地域との連携、あるいは理解を得る、ということが課外活動では非常に重要なことがわかった。
- ・教員はただ部活動の指導だけではなく、普段の他の教員とのつながり、理解を得ること、特に事務関係に十分な理解を得ることが大切だと感じた。
- ・予算やマネジメントなど、これまで自分が参加した部活動ではこのようないろいろなことが行われていたことがよくわかり、先生の苦勞も理解できた。
- ・新しい授業とのことだが、実際の現場を見学に行くなど、非常に実践的な内容で非常に役立った。
- ・部活動の指導だけではなく、教員になる、ならないにかかわらず人間としての生き方、または他を動かす説得力のあるコミュニケーション力が重要だと認識した。

5. 今後の課題等

学生により授業参加へのモチベーションの違いが際立った。中等コースの音楽専攻の学生は非常に積極的で、見学においても常に他をリードする傾向が見られた。小学校サブコースの履修性は、学生によりその取り組みの差が顕著であった。課題は提出するし、意見も出すが、やらされている感が強い学生もいた。

学生からも質問が出たが、今回、スポーツ系と音楽系のみ部活動を取りあつかった。もちろん、他にも部活動はあるが、やはり指導、保護者との関係、セクハラ、パワハラ問題、外部指導員、など様々な問題が起きやすい種類の部活動として、スポーツ、音楽系に絞るのは妥当だと感じた。

来年度は、より学生たちが積極的に授業に取り組めるよう、見学の範囲を広げ、たとえばこれまで本教育学部でもあまり顧みられなかった私立学校などにも視野を広げてほしいような気がした。

また、今回のように、人数、内容ともに充実した学校の部活動だけではなく、10名以下の少人数の公立学校の吹奏楽部なども対象にすることもよいと感じた。また、このような内容の授業では附属学校での見学はあまり意味をなさないことも痛感した。やはり、全国レベル、少なくとも地区大会レベルの部活動を見学しても得るものは少ないように思う。

来年度は、合唱部にも視野を広げ、①全国大会レベルの学校、②小中学校などの校種、③小規模校の活動、④水軍太鼓などこの地域独自の課外活動、この4点を目標に授業計画を行う予定である。